中世文学の課題

――功力と鎮魂――

望月　真

はじめに

「紀要」第十八号で地蔵菩薩霊験譚にも触れたが、観音信仰も注目すべきものあり、多くの霊験譚が生じた。また中世文学でしばしば「往生の素懐」についての記述に出会う。そして極楽浄土に往生したとはいえ、なお妄執のため解脱できない世界が能の舞台に展開するのである。日本の文学と思想の考察に、謡曲の占める位置は実に大きいと思う。これについては今後の研究課題として銘記したい。

一、観音の霊験譚

徒然草の六十九段は「書写の上人は、法華読誦の功つもりて、六根浄にかなへる人なりけり」ではじまるが、播州書写山の性空上人の逸話である。上人が六根浄を得た話は元亨釈書に見える。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清浄になると、その功徳によって奇跡を行なうことができ、上人こそ法華経にも見える六根浄に適った人であった。

法華験記や今昔物語には、仏教説話が多く集録され霊験あらたかである。今昔物語の本朝部巻十五の十二話には、比叡山横川の境妙という僧の往生譚がある。

近江の国の人なり。幼くして山に登りて出家して、師に随ひて法華経一部を受け学びて後、日夜に読誦する程に、暗に思えにけり。然れば年来、他の念なく法華経を持ち奉りて、既に二万部を読誦したり。

とあり、臨終には「数多の僧を請じて、法華経を読誦せしめ懺法を行はしめ、念仏三昧を修せしむ」という。巻十二の三十二話に見える横川の源信僧都は「静かに法華経を誦じ念仏を唱へて、偏に後世菩提を祈る」「法華経を読誦し念仏を唱ふる事怠らず」とある。続く三十三話の多武の峰の増賀聖人は、十歳で比叡山に登り出家して、「法華経を受け習ひ、顕密の法文を学する」のである。巻十四の二話には「善根の力に依りて、我等、畜生の報を棄てて、今忉利天上に生まるべし」「法華経の威力不可思議なり」と記され、また「陀羅尼を誦して功を積」み（十二の二十五）、「真言の密法を受けて、毎日の行法怠らず」（十三の二十九）、天台の止観を学し、華厳経・涅槃経・大般若経等を持ち奉るのである。

巻十三の三話では「天台の法文を習ひ、法華経を受け持つ……亦、自ら法華経を書写して日夜に読誦」し、苦行を修して仙人と成り、十三話は出羽の国、竜華寺の妙達和尚の賛辞である。「身清くして心直し、亦、常に法華経を読誦して年を積めり」「生きたる間、法華経を

読誦する事、更に怠らず」という。この和尚は天暦九年急逝したが、七日後によみがえり、閻魔王の宮に行ってきたことを語った。これを聞く人は「悪心を止めて出家入道する者多かり。或は仏像を造り経巻を写し、或は塔婆を起て、堂舎を造る者限りなし」という。現在、山形県鶴岡市の西に善宝寺があり、妙達の開基とされる。

これに次ぐ十四話の加賀の国の翁和尚は、日夜寝てもさめても「法華経を読誦して更に余の思ひなし。形、俗なりといへども、所行貴き僧に異ならず」というので、翁和尚と称された。そして法華経を読誦して怠らず「身貧しくして一塵の貯へなし。只、身に随ひて持たる物は法華経一部なり」と見え、

命終る時には、寿量品の偈の終り、「毎自作是念　以何令衆生得入無上道　速成就仏身」と云ふ所を誦して、心違はずして失せにけり。

という。これを見聞して人々は、出家の身でなくても道心を起して法華経を読誦すべきであると語り伝えている。

これらの和尚をはじめ持経者として法華経の流布弘通に専念し、「聖」とも呼ばれた人がいた。六十六部の法華経を書写し、全国を回って各霊場に一部ずつ納めて歩いた修行者を「六部」というが、「六十六部」の略で、平賀源内（風来山人）の浄瑠璃「神霊矢口渡」に「願ふは弥陀の誓願力、六十六部廻国に姿を略す云々」と出ており、近世では俗体に白衣をまとい、鉦をたたき笈を背負いなどして巡拝して歩いた。東海道中膝栗毛三下には「六部がひとり、巡礼ふたり」「順礼や六部と一所に、木ちんどまりをしやした」とか、菩提心を発起して、ほとけごころをおこして「六部になり申した」などと出てくる。川柳に

古郷へ廻る六部は気の弱り

などと人情の機微をうがった句もある。そして罪障消滅のため、後世安楽のためにも一念発起して廻国行脚の旅に出たが、時には銭や米などを乞いながら歩く者もいた。「仏教語大辞典」（中村元著）を参照すると「聖」は

この語の本来の意味は、単に「日知り」であり、知日の合成になる智とも通じ、「物知人」でもあり、幽顕の神理に通達するの意味であったであろう。

とされ、「後世では、特に隠遁した高僧の称呼となる」とある。平安中期、阿弥陀仏の名号を唱えて踊った空也上人は「市聖」と呼ばれ、高野聖や遊行聖もいた。中国では「聖」は、耳がよくとおって神の声を聞きとることのできる人のこと、引いて、知徳の最もすぐれた人、聖人の意になった。

万葉集巻一の柿本人麻呂の長歌に「日知之御世」と出ているが、本居宣長は「日知」は「日のごとくにして天の下を知らしめすといふ意。太陽のごとく万事を知る意」と「古事記伝」の中で注している。「知る」は、古語では「領る」で、統治する、領有する意があり、「知らす」は、お治めになる、統治なさると訳され、「す」は尊敬の助動詞である。古くは垂仁紀に「日本国に聖皇有す」と訓読している。古事記上の「聖神」を岩波の大系本では「ひじりのかみ」と訓じ、「日知りの神の意で、暦日を掌る神か」と頭注にある。下巻では仁徳天皇の御世をたたえて「聖帝の世と謂ふなり」と見える。ここは徳の高い儒教的な聖天子と解される。なお推古紀では「真人」を「ひじり」と訓じているが、老荘思想で道の奥義を体得した至人をいう。

源氏物語の「宿木」に見える「ひじりの道」は明らかに仏道で、今昔物語（一の三）の悉達太子が「聖の道を観じ給ひけり」も同類であり、深遠な仏道の真理を静かに観察し悟られたのである。慈悲の権化とされる観世音菩薩の信仰は平安期に高まり、今昔物語巻十六を特に参照したい。その四話に丹後の国の成合観音の霊験譚がある。現在は宮津市で、天の橋立の北方の山にあり、橋立の観音ともいう。

梁塵秘抄巻二に

四方の霊験所は、伊豆の走湯。信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか。土佐の室生門、讃岐の志度の道

場とこそ聞け。

とあり、古来修験の道場として知られた。成相寺は成合寺とも書き、この寺を成合といういわれについて語っている。

昔、仏道を修行する貧しい僧がいて、その寺に参籠している間に雪が積り、風が吹きすさんで、人も通わなくなった。僧は何日も食糧がなく死の不安におそわれた。雪のため里を出て托鉢することもできず、草木の根や実もない。しばし我慢していたが、十日ほどたつと、力もなく起きあがるすべもない。堂の東南の角に、みのの破れたのを敷いて寝ていたが、木を拾って火をたくこともできない。寺は破損し、はげしい風雪で恐しく、読経する気力さえなかった。食物のあてもなく、今はこれまでと覚悟して、ひたすら観音を念じている間に、寺の北西の隅の方に狼に食われた猪が横たわっていた。これは観音さまが下さったものであろうから食べようと思うが、「生有る者は皆、前生の父母なり」と聞いている。殺生戒に背くと知りつつも、人の心の愚かさで当面の飢え苦に堪えられない。猪の左右の股の肉をとり、鍋に入れて煮て食べた。「其の味甘きこと並びなし、飢の心皆止まりて、楽しき事限りなし」という。

重罪を犯した事を悲しんでいたが、雪もやっと消え、参詣の人々が、この寺の修行僧はどうなったことだろう、深い雪の中で飢え死にしたことだろうかなどと云い合っていた。僧はこれを聞いて深く恥じ悲しんだ。人々はどうして毎日過ごされましたかと云って寺を一巡してみると、鍋に桧の木を切って入れ、煮て食い散らしてあった。人々が仏像を拝見すると、左右の股の部分が新しく切り取られていた。「此れは僧の切り食ひたるなりけり」と浅ましく思って僧を詰問した。僧は驚いて仏を見奉るとまさにその通りだった。そして煮て食べた猪は、観音が私を助けるために猪に成って下さったのだと恐れ入り、人々に事の真相を語ると皆感涙にむせんだ。

僧はその時、観音に向かい奉り、もしこれが観音さまがお示し下さった事なら、元のようにおなり下さいと申し上げると、皆人が見ている前でその左右の股が元のように成った。人々は皆感泣したという。こうしてこの寺を「成合」というのである。「成合」は本復、「成り合う」は、すべての部分が整って完成する意であるが、成相寺は西国三十三所の一で庶民の信仰が篤く、巡礼も跡を絶たない。

堀一郎氏は「日本宗教の社会的役割」の「日本人の宗教生活」の中で

中世的な遍歴信仰の中心をなした三十三所の観音札所巡礼も、観世音という範疇のもとに、法華経普門品の三十三化身の教理から着想せられたものといわれている。しかし同じ札所といっても、まつる所のもの必ずしも同一ではない……「南無大慈大悲観世音菩薩」の共通する呪言のまにまに止揚して、人それぞれの異なる願望を希求をささげてきたのである。

と述べられている。観音さまを念ずれば七難を避け、生老病死の四苦からものがれ、三毒を滅することができるという。インド・中国にも観音さまの像が随処に見られ、観音信仰はアジアの民衆の心に深く浸透してきた。

法華経の観世音菩薩普門品第二十五は、観音経として、独立したお経のように尊崇され、これを講義する法要も営まれ、その信者による講中が観音講で、西鶴の世間胸算用にも出てくる。

今昔物語の巻十六は観音の霊験譚で占められているが、巻十二の二十七話には「魚化して法華経となれる話」がある。

大和の国の吉野に山寺があり、天平勝宝の孝謙天皇の御代、仏道に精進する住職がいた。しかしこの僧は病身で衰弱し、立居振舞も意に任せず飲食も進まず、明日の命も覚束ない状態だった。かねてより病をなおすには、栄養の多い肉食がよいと聞いていた。仏道修行の身には、魚を食べることはそれほど重い罪ではないと思い、ひそかに弟子に語った。「わたしは病身だから魚を食べて命をながらえようと思う、魚を買い求めて私に食べさせてくれ」と。そこで弟子はすぐに紀伊の国の海辺に一人の童子をやって魚を買わせた。童子

はいきのいい魚を八尾買い取り、箱に入れて帰る途中三人の男に出くわした。男は童子に「お前が持っている物は何か」と聞いた。童子はそれが魚であるとは云えず、ただ口に任せて「これは法華経なり」と答えた。しかしよく見るとその箱から汁が垂れて臭い香もただよう。男はこれは確かに魚であり、経ではないという。童子はやはり経であると云い張る。一の市に至り一休みして更に念をおしていう。「汝が持たる物は、なほ経には非ず。正しく魚なり」と。しかし童子は、魚ではなく経であると押し通す。男どもの疑い消えず、箱を開いて見ようという。童子は開くまいとしたが強引に開かせたので、うそがばれることを気づかい、はらはらしていた。しかし箱の中には、法華経八巻があった。びっくりしたのは男の方で、恐怖感の余り立ち去った。童子もふしぎなこともあるものと帰路を急いだが、この男どもの一人は、なおこの事を怪しんで、疑点をあばこうとして童子の後について行った。童子は山寺に着いて、師匠に事の一部始終を報告したが、これを聞いて一度は奇妙なことだと思った。しかしまた喜んで「此偏に、天の我を助け守護し給へりけるなり」と悟った。この魚を食べる所をさぐりにきた男が山寺に来てこれを目撃し、五体を地に投げて僧に向かって申し上げた。「実に此れ、魚の躰なりと云へども、聖人の食物と有るが故に化して経と成れり。愚痴邪見にして因果を知らざるに依りて、此の事を疑ひて、度度責め悩ましけり。願くは、聖人此の過を免し給へ。此より後は、聖人を以て私が大師として懇に恭敬供養し奉らむ」と云い、泣く泣く帰った。その後、此の男は僧の為に大壇越と成って、常に山寺に行って心から供養したという。一般に戒律は特に厳しい仏教であるが、この後に次のように見える。

　此れ奇異の事なり。此れを思ふに、仏法を修行して身を助けむが為には、諸の毒を食ふとも、返りて薬と成る、諸の肉を食ふと云ふとも、罪を犯すに非ずと知るべし。然れば、魚も忽ちに化して経と成れるなり。

そしてこのような事が起こることを決して誹謗してはならないというのである。

　観音の霊験は、観世元雅の謡曲「盛久」にも見える。シテの盛久は、たまたま丹後の国成相寺に忍んでいた所をいけどられ、ワキの土屋某が鎌倉で盛久を斬る役を命じられた。盛久は清水の観世音を信じ、毎日参詣を休んだことがない。

　われこの年月清水の観世音を信じ、毎日かのおん経を怠ることなし、さりながらけふはいまだ読誦申さず候ほどに、おん暇を賜はり候へ、かのおん経を読誦申したく候。

鎌倉に護送され、やがて由比が浜の刑場におもむく。そこで奇跡が生じた。次の掛け合いの部分に注目したい。

ワキ　さて由比の汀に着きしかば、座敷きを定め敷き皮敷きて、早々直り給ふべし

シテ　盛久やがて座に直り、清水のかたはそなたぞと、西に向かひて観音の、み名を唱へて待ちければ

ワキ　太刀取りうしろへ巡りつつ、称念の声の下よりも、太刀振り上ぐればこはいかに、おん経の光眼に塞がり、取り落としたる太刀を見れば、ふたつに折れて段々となる、こはそもいかなることやらん

なおまた「経文あらたに曇りなき、剣段々に折れけり、末世にてはなかりけり、あら有難のおん経や」とあり。大慈大悲の観音のご利益により刑死をまぬがれたのである。文永八年九月の日蓮の竜口法難も彷彿されると思う。

二、往生の素懐

　古今著聞集巻六に「侍従大納言成通　今様を以て霊病を治する事」がある。藤原成通が雲林院で蹴鞠をしていた時、夕立にあい雨宿りをしていたが、神歌を口ずさむと格子の中の病人の容態が快方に向かったというので

いづれの仏の願よりも　千手のちかひぞたのもしき　かれたる
草木もたちまちに　花さきみなるとときたれば

という今様をくり返し歌った。今様は七五調四句から成り、梁塵秘抄には、初句が「よろづの仏」、末句は「花咲き実生ると説い給ふ」とあり、平家物語巻二の「卒都婆流」にも引用され、末句の終わりが「こそきけ」となっている。更に又

薬師の十二の誓願は　衆病悉除ぞたのもしき　一経其耳はさておきつ　皆令満足すぐれたり

と歌うと病魔が退散したりとあり、「通ぜる人の芸には、霊病も恐れをなすにこそ」と結んでいる。これも梁塵秘抄には初句末が「大願は」となり、大医王仏と云われる薬師如来は、もろもろの病を悉く除くとされる。

古今著聞集巻八には「仁和寺の童　千手参川が事」がある。紫金台寺の御堂で、笛を吹き、今様などを上手にうたう千手という少年がいたが、初参の参川にその寵を奪われた。ある日の酒宴に千手が召され、目もあやな装束で今様を歌った。

過去無数の諸仏にも　すてられたるをばいかがせん　現在十方の浄土にも　往生すべき心なし　たとひ罪業おもくとも　引接し給へ弥陀仏

千手の心を思うと余りにもあわれで、聞く人は皆涙を流した。その夜から千手は再び寵を受けるに至ったが、参川は一首の歌を遺して、高野に隠遁したというのである。

慈円の愚管抄巻四に

保元元年七月二日、鳥羽院うせさせ給ひて後、日本国の乱逆と云ふことはおこりて後武者の世になりにけるなり。

とあるが、保元元年（一一五六）、西行は三十九歳で聞書集には時勢を慨嘆した歌がある。

よのなかに武者おこりて　西東きたみなみいくさならぬところなし　うちつづき人の死ぬるかずきくおびただし　まことともおぼえぬほどなり　こはなにごとのあらそひぞや　あはれなることのさまかなとおぼえて
しでの山こゆるたえまはあらじかし
亡くなる人のかずつづきつつ

永承三年（一一三四）に洪水・飢餓が流行したことが百錬抄・中右記に見え、方丈記にも「崇徳院の御位の時、長承のころとか、かかる例ありけりと聞けど、その世のありさまは知らず云々」と出ており、「また、同じころかとよ、おびただしく大地震ふること侍りき。そのさま、よのつねならず」とある。

今鏡にも「法皇鳥羽崩れさせ給ひぬる後、世の中に事ども出で来て、讃岐へ遠くおはしましにしかば云々」と見える。乱世のはじまりは、この保元の乱に発し「世に聞ゆる事ありて、いひしらぬ軍の事ども出で来て、帝後白河の御方勝たせ給ひしかば、賞ども行はせ給ひき」とも記され、荘園体制の後退と武士勢力の進出を見るに至った。この政治的社会的変動に仏教の末法思想が大きく投影する。

和歌所寄人でもあった慈円の拾玉集五に

かなしきかなや仏法すゑになるままにその跡はみなたたかひの庭となりてはてにはほこさきをあらそひむつかしき相論をのみこのみて天聴をおどろかすことになるぞかし……遁世のひじりといふものいできたりしかばたうとしときこしかども今はまたひじりと云ふものはみなさまあしきものなり。

とあるのも世相の一端が推測される。かかる乱世を生きた女性の運命はあわれである。

平家物語巻一の祇王と仏御前は、はからずも清盛の寵を争う破目に立ち至ったのである。京都の嵯峨野には、祇王祇女姉妹とその母、及び仏御前の隠棲の跡と言われる祇王寺がある。祇王は平安朝末期に人気のあった舞姫、いわゆる白拍子で、時の最高権力者だった平清盛の寵愛を受けるようになった。父の死後近江の国から一緒に上京した妹の祇女と母親まで一家揃って優遇されることになった。し

かしそれも束の間、清盛の愛は加賀の国より上京してきた十六歳の仏御前に移っていった。若い仏御前は、白拍子として一度は清盛の前で舞を舞ってみたいと願い、進んで清盛の館へ出向いた。しかし清盛は顔を見ることもなくすげなく追い返そうとした。その時祇王が「ただ理をまげて、めしかへして御対面さぶらへ」と清盛にとりなしたのである。そして「今様一つうたへかし」という清盛は、所望にこたえて見事に歌いおさめた仏御前に心が移ってしまった。こうして三年間暮らした所に名残を惜しみ、泣く泣くふすま障子に

もえ出づるも枯るるも同じ野辺の草
いづれか秋にあはではつべき

という一首を書き残して去って行った。「一樹のかげにやどりあひ、おなじ流れをむすぶだに、別れはかなしきならひぞかし」とあるように祇王の心中察するに余りある。

かくて年も暮れ、あくる春のころ、清盛は仏御前を慰めるために「今様をもうたひ、舞などをも舞ふ」ようにと召し寄せるのである。これには祇王も返事もできずにいたが、母親が孝行だと思って行ってくれと頼むので、止むなく出向いて次の今様を歌うのである。

仏も昔は凡夫なり　我等も終には仏なり　いづれも仏性具せる身を　へだつるのみこそかなしけれ

しかも清盛は「此の後は召さずとも常に参って、今様をも歌ひ、舞などをも舞うて、仏なぐさめよ」と言うのである。前に引用した古今著聞集の千手の今様にも類するが、千手は成功し、祇王は不成功に終わっている。そして寵を失なった参川が出家したように、ここでは祇王も二十一で尼になり、妹も姉の後を追い母親もまた同じく仏門に入った。

再三のひどい仕打ちに「障子の内に倒れ伏し、ただ泣くより外の事ぞなき」という祇王はひたすら耐え抜くのである。そして一度は死を思い立つが最後に行き着く安楽の法門として出家があった。

王朝期の女性も現実に破れた時、その避難所として仏門に入っている。しかし平家物語の女性達は実に深刻な心の葛藤を経験した。祇王と運命を共にした祇女は一九、母親も四十五歳で、親子三人が嵯峨の奥に草庵を結び念仏三昧に余念がなかった。

一方仏御前は祇王が書き遺した歌を読み、一時の栄華に甘んじて死後の事を考えないことを悲しみ、十七歳で仏道に入る。光源氏や薫の道心についての考察もあるが、これは祇王と仏御前の求道物語の観がある。

春が過ぎ、夏が過ぎ、秋に入ったある日の夜ふけ、親子三人念仏している所に竹の編み戸をたたく音がした。初めは魔物でも来たかと思っていたが、開けてみるとそれは仏御前であった。切切たる真情の表白がある。

つくづく物を案ずるに、娑婆の栄花は夢のゆめ、楽しみさかへて何かせむ。人身は請けがたく、仏教にはあひがたし。此の度泥犁（＝奈落、地獄）に沈みなば、多生曠劫をば隔つとも、浮びあがらむ事かたし。年のわかきをたのむべきにあらず、老少不定のさかひなり。出る息の入るをも待つべからず、陽炎稲妻よりなほはかなし。一旦の楽しみに誇って、後生を知らざらん事のかなしさに、けさまぎれ出でて、かくなってこそまいりたれ。

そして「命のあらん限り念仏して、往生の素懐を遂げんと思ふなり」とさめざめとかき口説くのである。祇王も涙をおさえて、自分は仏門に入ってもなお妄執を断ちきれず、「ともすれば我御前の事のみうらめしく、往生の素懐を遂げん事かなふべしともおぼえず」と告白し、「今年はわづかに十七にこそなる人の、かやうに穢土をいとひ、浄土を願はんと深く思ひ入れ給ふこそ、まことの大道心とはおぼえたれ。うれしかりける善知識かな。いざもろともに願はん」と一蓮託生、共に極楽往生を願い、日夜念仏をとなえ遂に四人揃って本志を遂げたという。かつての仇敵がかえって自分を仏道に導いてくれる有難い善知識であった。経路は違っても行き着く所は同じく現世の無常を観じたのであった。横暴不遜な男に翻弄され失意のどん底

に落されたが人の世の不如意に想到し、やがて仏道へと導かれるのである。悲しみに打ちひしがれている時にも、祇王は部屋を掃いて、見苦しくないように片づけることも怠らなかった。

平家物語は清盛をはじめ、義仲・義経等に代表される男性をめぐる物語であるが、その中に女性を主とした物語が所々にはさまれていることも看過できない。女性達は脇役的存在ではあろうが、合戦にあけくれする剛勇な武士に交って、王朝風の優雅さを添えている。

笠原一男編「激動の世と女の哀歓」（日本女性史2）に、被衣姿の仏御前が突然祇王達を訪れ、涙をこらえて語りかける場面に論及し、

そもそも女人成仏を、はじめて真正面から本格的にとりあげたのは鎌倉仏教であるといっても過言でないが、それすらも救われるためには変成男子の機縁を必須と説いていた。女人はまだ、女人のままで救われるのではなかったのである。そうした時代であったことを考えると、わたくしは、このとき二人の女性の間に交わされた話は、僧や学者（男性の）の説く浄土の教えとは別の意味において、一個の平凡な女人が、生活の場からにじみ出た魂の語として注目すべきものと思う。

とされ、更に「日本の歴史において、女性がみずからの意志で女性の目を通して現世におけるおのが位置を認識したことを表白する、早い例の一つと思うのである」としている。白拍子は平安末期に直垂・立烏帽子に腰に刀を差して今様を歌いながら舞った遊女で、後には水干に袴だけで舞うようになり、室町時代に能楽に合流するに至った。はじめは男装であることから男舞といい、その舞は、楽器などの伴奏を伴わず拍子だけで舞うので白拍子とも呼ばれた。能楽で特に注目したいのは、ワキの旅僧による読経の功徳により亡者が成仏して行くことと、その多くが舞を伴うことである。先に和歌による霊験について触れたが、宗教的儀礼には歌舞音曲が欠かせなかった。それは鎮魂のためでもあった。

なお仏教では世楽・道楽・法楽の三つの楽しみをあげるが、法楽はもと仏法を信じ徳を積む真の楽しみで、成唯識論巻十に「尽未来際、恒に自ら広大の法楽を受用す」とあるように、自受法楽で法悦の境地である。ここから神仏の手向けにする行事の意に用いられるようになった。世楽は、近世の鈴木正三の反故集にも「快楽自在にして、心のままなる世楽を得給へり」とあるように世間的快楽をいう。道楽も本来は自分の職業以外のことにふけり、その道を楽しむ意であった。これを「みちがく」と読むと、雅楽の演奏方式の一で、天子の行幸・大葬、又は神幸の時などに歩きながら演奏するのである。仏教では法会の時に読経しながら堂内をめぐり歩くのを行道という。後には列をなして道を練り歩く意にもなったが、もとは仏像のまわりをめぐり歩き礼拝し、仏の功徳を賛嘆することであった。平家物語九の「敦盛最期」に

狂言綺語のことはりといひながら、遂に讃仏乗の因となるこそ哀れなれ。

と見えるが、ここでは敦盛の笛が熊谷直実を感動させて悟りの世界に至らせる。つまり出家得道せしめる機縁となったというのである。

無量寿経下に妄言を十悪の一としてあるが、今鏡の打聞にも「大和にも、唐土にも、文作りて人の心をゆかし、暗き心を導くは常の事なり。妄語などいふべきにはあらず」「仏も譬諭経などいひて、なき事を作り出だし給ひて説き置き給へるは、こと虚妄ならずとこそは侍れ」とあり、また

唐土に白楽天と申しける人は、七十の巻物作りて、詞をいらへ譬をとりて、人の心を勧め給へりなど聞え給ふも、文殊の化身とこそは申すめれ。

と見える。白氏文集は、白氏長慶集ともいい、七十五巻である。その香山寺白氏洛中集記に「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤りを以て、翻して当来世々讃仏乗の因、転法輪の縁と為さむ」と見え、この思潮は平安末期より深く人心に浸潤するに至った。

「転法輪」は、釈迦が十九歳で出家し、悟りを開いた後、一切衆生

の煩悩を打ち砕いて正法を説かれたことで、栄花物語十七「音楽」にも「降魔、成道、転法輪、忉利天に昇り給ひて」等と見える。

沙石集五では和歌を「発菩提心のたより」とし、「疑ひ無く陀羅尼なるべし」と言っている。陀羅尼は梵語の呪文をそのまま読みあげるもので、短いものは真言である。同じく

神明又多く歌を感じて、人ののぞみを叶へしめ給ふ。旁和歌の徳、総持の義、陀羅尼と一に心うべし。

とある。なお次の条も注意したい。

西行法師遁世の後、天台の真言の大事を伝へて侍りけるを、吉水の慈鎮和尚伝ふべきよし仰せられければ、「先づ和歌を御稽古候へ。歌御心えなくば、真言の大事は、御心え候はじ」と申しける故に云々

慈鎮和尚の拾玉集五には「真言の梵語こそ仏の御口より出たることなれば仏道におもむかん人は本意ともしるべけれ」とあり、日吉法楽百首はじめ、法楽のための詠歌が多い。

栂尾の明恵上人伝記上に「西行法師、常に来て物語して云く」として「歌即ち是れ如来の真の形体なり、されば一首読み出ては一体の仏像を造る思をなし、一句を思ひ続けては秘密の真言を唱ふるに同じ。我此の歌によりて法を得る事あり云々」とある。仏道からみれば歌道は邪道であったが、西行や慈円においては歌道即仏道に達した。拾玉集四には「願はくはこの浅き狂言綺語にて深き讃仏乗転法輪の道へかへし入れ給へ」と見える。自受法楽と摂取不捨の面から中世文学の理解を更に深めたいと思う。

「祇王」の巻で「後世を願ふぞあはれなる」としながらも「念仏して、往生の素懐を遂げん」「このたび素懐を遂げんこそ、なによりもってうれしけれ」という。「大原御幸」には「女院、つひに建久のころ、竜女が正覚のあとを追ひ、往生の素懐を遂げ給ふ」と見える。狂言の「悪太郎」には「念仏百万遍申されければ、つひに決定往生の素懐を遂げられた」とあり、日葡辞書にも「ワウジャウノ　ソクワイヲトグル」と出ているように慣用語であった。既に「権記」の長保四年二月三日の条に「昨日中将詣飯室剃髪、遂素懐也」と出ている。「往生要集」大文第四には「利益衆生為本懐」と見え、「本懐」は古くは「ほんがい」と訓じ、素懐と同じくかねてからの願い、本望の意である。ただ素懐には出家しようとする願望の意があることを注意したい。

梁塵秘抄の口伝集巻十には、遊女が「聖徳太子の歌を謡ひて素懐を遂げにき」とあり、巻二の法文歌には

阿弥陀仏の誓願ぞ、返す返すも頼もしき、一度御名を称ふれば、仏に成るとぞ説いたまふ、

などとあり、浄土信仰の弘通が看取される。

三、謡曲の究竟

世阿弥の談話を筆記した「申楽談儀」に「静かなりし夜、砧の能を聞きしに、かやうの能の味ひは末の世に知る人あるまじければ書き置くも物臭き由、物語りせられしなり」とある。中世は所領争いが多く、訴訟のため上京する話が能や狂言にもよく出てくる。夢幻能「砧」でも夫（ワキ）は妻（シテ）を故郷に残し三年も在京したままである。

これは九州芦屋の某にて候、われ自訴のことあるにより在京仕り候、仮そめに在京と存じ候ひつれども、当年三年になり候。「鄙の住居に秋の暮れ、人目も草も離れ離れ」の妻は、閨怨の情抑えがたく、秋の夜長を漢の蘇武の昔を偲びながら、砧を打ってわが身を慰めるのである。しかし夫は帰らずやがて妻は病の床に伏し死んで行く。帰国した夫の前に、今は亡霊として現われる妻は、「君いかなれば　旅枕、夜寒の衣　現つとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや　恨めしや」と訴える。結末は法華読誦の功徳で成仏することになっている。愛する人への恋情が一転すれば凄絶な嫉妬に変るのである。これは同じ四番目物の「葵上」と「道成寺」の二曲にも云

える。六条御息所の嫉妬が生霊となって光源氏の北の方葵上を苦しめる。愛人の怨霊は烈火の如く、何もかも焼きつくさんとばかり荒れ狂う。物の怪の調伏に招かれた修験者も手を焼くが、その法力により御息所を成仏させている。源氏物語の筋とは大分違っている。

能をはじめ古典文芸に造詣深い白洲正子氏は随想集「道」（新潮社版）の中で

> 六条御息所が、この世を去った後までも、情火に焼かれて苦しむのは、それは小説の世界のことで、人の心を持つ鬼は、人間の姿に還して、魂を鎮めるのが、古典芸能のつとめである。

と記され、そして「それだけ宗教儀礼に近いともいえる」と言われている。これは神事物として、また草木国土悉皆成仏を眼目とする謡曲の究意を考察する上で傾聴に値する。一般に日本の芸術は古くから鎮魂的要素が濃い。謡曲、歌道はじめ、茶道、華道やその他の芸道の多くは、自他共に心を鎮める為に作られ、上演され、観賞されてきた。

平安末期、鳥羽天皇の時、女が男装して演じたという男舞は、はじめ白拍子が直垂に烏帽子をつけ、白太刀を差して今様を歌いながら舞った。後白河法皇や平清盛は、白拍子を特に寵愛した。「道成寺」では女の執念が蛇と化して男を追い、怨霊の化身である白拍子の舞となる。これがこの曲特有の乱拍子であるが、僧の祈りで鐘が吊上がり、鬼女が現われて幕入りとなる。道成寺は和歌山県日高郡にある天台宗の寺で、ワキはこの寺の住職である。女の化身である前シテが「これはこの国の傍に住む白拍子にて候、鐘の供養を拝ませてたまはり候へ、さあらば鐘の供養に舞を舞ひ候ふべし」という。そこで能力（寺男）が「なかなか女人はかなふまじきよし仰せられ候へども、舞を面白うおん舞ひ候はばそれがしが心得にて、そと場へ入れ申さうずるにて候」というのである。女は「あら嬉しや、涯分（＝精いっぱい）舞を舞ひ候ふべし」といって舞台に入る。舞を「面白う」舞うことに大きい意味があるが、愛する夫の形見の品や、行方知れぬ子供の衣装を着て舞う能が多い。「井筒」では、在原業平の愛人の亡霊が、業平の形見の冠をつけ、直衣を着て現れ、「松風」でも在原行平に愛された海人の亡霊が、行平の形見の烏帽子、狩衣を身につけて舞うのである。生前身につけていたものには、故人の魂がこもっていると考えられ、形見分けの風習はもともとここから生じたものであろう。「隅田川」でも、旅の男（ワキ連）が「都より女物狂ひの下り候ふが、是非もなく面白う狂ひ候ふを見候ふよ」と言うが、囃子につれてシテ（狂女）が登場する。塗り笠をかぶり、笹を手にした物狂いの装束である。ワキ（渡し守）も「都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せよ、狂うて見せずはこの舟には乗せまじいぞとよ」という。近年この物狂いの源流が巫女であるという説もある。柳田国男氏の「巫女考」に

> 和漢三才図会第七に、「今の巫女の業とする所は神楽を奏して以て神慮を慰め、或は竹葉を束ねて以て極熱の湯を探り、屢々身に注ぎ浴す。既にして心体共に労倦し茫々然たり。時に神明彼に託り以て休咎（吉凶）を生じ、之を湯立と謂ひ其の巫を伊智と曰ふ」とある……精神を籠めて度々笹の葉を以て熱湯を身に注ぐ間に、知らず知らず心持が変って来て託宣に適する心理状態となるのである。

と見える。「隅田川」「百万」などの狂女も巫女のように手に笹をもって出てくるが、これを狂い笹といい、物狂いの象徴でもある。「伊智」は「市子」で、神おろし・口寄せ・占いなどをする巫女で、梓弓を鳴らしてするので、「あずさみこ」ともいう。また笹の葉を手に持って祈るので「笹叩き」「ささっぱたき」などという。浮世風呂前上に「お祢宜どのの占も、市子の笹ばたきもいらねへ」とあり、柳多留十三に「黒土にするぞとこわい笹ばたき」という川柳もある。口寄せのとき「これを聞き届けぬと、何もかも黒土にするぞ」などというのは、実に恐ろしい感じがする、との意である。なお神楽歌の採物に九種あるが、篠（笹）をはじめ、榊・幣などが代表的なもので、万葉には「さ

さ」を「神楽」と表記した例がある。弓も神を招き、悪霊を退散させるものとして源氏物語の「葵上」「夕顔」にも出てくる。要するに狂女が登場する時に手に持つ笹は、巫女が神を招く一用具の遺風であろうという。この物狂いは、白拍子のように当時の男性に最も魅力ある、面白い女性で、その舞は格別人気があったことだろう。中には渡り巫女という一種の旅芸人の徒もいた。白洲正子著「古典の細道」の「旅の芸術家」に次の一節がある。

お能はいってみれば、旅が生んだ芸術である。旅僧（ワキ）が出て来て、色々な人間（主に幽霊であるが）に出会い、不思議な経験をする。あるいは「道行」が重要な場面となり、橋掛りは楽屋から舞台へ至る「道中」に当たる。といったように、お能のどの部分をとってみても、旅が中心となり、旅が主題になっていない曲はない。それはついに、「一所不住」という一つの思想に昇華されて行った。

「花伝書」の「別紙口伝」には

花と、面白きと、珍らしきと、これ三つは同じ心なり。何れの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く頃あれば、珍らしきなり。能も住する所なきを、先づ花と知るべし。

と見える。「住する」は、とどこおる、停滞する、こだわる意で、金剛経に「応無所住而生其心」と出ている。　徒然草の二百四十一段には「望月のまどかなる事は、暫くも住せず、やがてかけぬ」とある。「世は定めなきこそ、いみじけれ」（七段）、「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ」（十九段）という兼好である。物事に、特に自己に執着するところに迷いがある。一所不住の旅芸人は行雲流水の如き日々で、そこに人生無常の深化が見られる。謡曲の作者には無常の諦観と深い古典的教養があったと思う。

能勢朝次著「謡曲講義」の緒言には

能学芸術の究極地は幽玄という理想である……謡曲に美辞麗句の多く用いられているのは、幽玄な気分情緒を豊富に醸し出すために、誠に必要な用意である。

と言われている。謡曲の美的効果を高める最も大きな要素は和歌の引用であった。能勢氏は「鎌倉時代の詞を対話の語に、平安朝の名句を謡う部分の文章に、そしてそれを割合に破綻なく融合させ、平家物語の文章をねらって作り出したのが謡曲である」とされる。能は暗い乱世の武将達の姿も、美しい詩句や歌で飾り、みやびた世界に作り変えた。

能楽論の「三道」は、通称「能作書」と云われ、応永三十年二月六日の奥書があり、世阿弥の二男元能に相伝した書と云う。能作の要諦を説いており次の一節がある。

女物狂の風体、是は、とても物狂なれば、何とも風体を巧みて、音曲細やかに、立振舞に相応して、人体幽玄ならば、何とするとも、面白かるべし、装ひを美しく、曲の懸りを巧み寄せて、事を尽くし、色を添へて、作書すべし。

要は、できるだけ演技内容を巧みに作り、扮装を美しくし、竹曲にも工夫をこらし、姿が優美で情趣があれば面白くなるであろうというのである。

さて狂乱物の主人公で、母親の失なったわが子に対する愛情からの狂乱と、女の男に対する思慕からのそれが最も多い。前者は「隅田川」「桜川」「三井寺」「柏崎」「百万」「飛鳥川」などで、後者は「班女」「花筐」「加茂物狂」「玉葛」「浮舟」「三山」などである。「芦刈」は、男の女に対する愛情による狂乱であり、子の父に対する愛情によるものに「弱法師」があり、また「木賊」は父親がわが子に対しての狂乱である。幼君に対する愛からの「高野物狂」もある。なお神霊の憑依による「歌占」「巻絹」や、亡霊の憑依による「卒都婆小町」「富士太鼓」「二人静」などがある。人間の怨念からくる妄執の恐ろしさ、それは復讐の一念となり炎のように燃えさかる。

世阿弥の名曲の一つと云われる「善知鳥」も鳥を殺した猟師が死後成仏できず、亡霊となって現われ、旅の僧に地獄の苦しみを訴え

て助けを求めるのである。「陸奥の、外の浜なる呼子鳥、鳴くなる声は、うとうやすかた」という伝説の歌がある。親鳥が「うとう」と鳴くと、子鳥が「やすかた」と答えるという。猟師はその鳴き声をまねて、鳥を捕えて渡世していた。殺生戒を破り、地獄の責苦を受けるシテが、痩男という死相のあらわれた能面をかけるところから痩男物と呼ばれる。ワキ（旅僧）は「南無幽霊出離　生死頓証菩提」と唱える。「助けて賜べやおん僧、助けて賜べやおん僧」と繰返して姿を消して行く幕切れは実にあわれである。

源平盛衰記の「伊勢の海阿漕が浦に引く網も度重なれば人もこそ知れ」から「阿漕」をシテ（猟夫）とする曲もある。日向の国の男が伊勢参宮を思い立ち、阿漕が浦まで来て、その浦の名の由来を聞くと、神宮の御前調達の網を引く禁漁区であるのに、阿漕という猟夫がこれを犯して捕えられ、沖に沈められたからと答えた。地獄で苦しむ阿漕の亡霊は旅人に菩提を弔ってもらうしか救われようがない。それにしても「これ世を渡る習ひ、われ一人に限らねども、せめては職を営む田夫ともならず、かく浅ましき殺生の家に生まれ、明暮物の命を殺すことの悲しさよ」と宿業におののく素凡夫である。この猟夫の亡霊が登場する「阿漕」や、四位の少将をシテとする「通小町」も痩男物である。少将の激しい恋は、死後も「煩悩の犬となって、打たるると離れじ」と小町の霊にまつわり、その成仏を妨げるのである。しかしこれも終には成仏となる。

源平の哀史につながる「藤戸」も注目したい。頼朝の家臣佐々木三郎盛綱（ワキ）は、先陣の功を立てた備前国藤戸の渡し場に乗り込んで来る。そこに一人の老母（前シテ）が、罪もないわが子を殺した盛綱に「わが子ながらもあまりげに、咎も例も波の底に、沈め給ひしおん情けなさ、申すにつけて便なけれども、おん前に参りてさむらふなり」と哀訴する。名立たる藤戸先陣の陰には、浅瀬を教えて海に沈められた若い漁夫の悲劇があった。盛綱は「なにごとも前世のことと思ひ、今は恨みを晴れ候へ」というが、「人目も知らず伏し転び、わが子返させ給へや」と哀惜の情は募るばかりである。さすがの盛綱も不憫に思い、老母を送り帰らせ、日夜弔いの読経に余念がなかった。「般若の舟のおのづから、その艫綱を説く法の、心を静め声を上げ、一切有情、殺害三界不堕悪趣」。真の知恵によって生死の海を渡り、悟りの彼岸へ達することを船にたとえ、大般若経理趣品の類句を引用している。大般若経を読誦すれば三界の一切の有情を殺害しても、三悪道に落ちることを免れるというのである。しかし夜明けに水上から漁夫の亡霊（後シテ）が出現し、「恨みは尽きぬ妄執を申さんため」と詰め寄るが、これも弔いの功力により成仏して行く。一切衆生を彼岸へ渡す仏法や仏の誓願を舟に譬え、「み法のみ舟」「弘誓の舟」といっている。

能は五番立ての構成で、これを神男女狂鬼とも呼んでいる。また舞楽でいう序破急の原則によっている。序は最初の導入部で、破という中間の部分は、さらに序破急に細分され、最終の部分が急である。つまり序は静かで品位がある神の登場するもの、急は鬼の活躍するもので、その間に破の序として男、破の急として狂者が登場する曲が並ぶというのである。

四番目でもワキ僧の回向が必要とされたが、同じ修羅の苦しみを訴えるものでも「頼政」は二番目物の夢幻能である。「実盛」も共に、老武者の最後を扱った修羅物である。諸国一見の僧（ワキ）が洛陽の寺社を残りなく巡拝して宇治へやって来ると、里の老人（前ジテ）が現われ、僧を平等院へ案内し、扇の芝で源三位頼政が自害した末期を物語る。実はそれは化身で「われ頼政の幽霊と名のりもあへず」忽ち消え失せた。旅の僧は成仏させようと回向すると、頼政の霊（後ジテ）が生前の姿で現われ、「泡沫の、あはれはかなき　世の中に、蝸牛の角の　争ひも、はかなかりける　心かな」と語り、なおも「ただただおん経読み給へ」と哀願する。宇治川の合戦の忠綱の奮戦ぶりなども克明に語るが、昔の勇将が名もない旅僧の功力によって修羅の苦患から脱し成仏して行く。心にしみる辞世がある。

埋もれ木の花咲くこともなかりしに
　身のある果てはあはれなりけり

惜しみても余りある風雅の士の断末魔である。非業の最期であればそれだけ追善供養して、後世を弔うのが人の世の常であり、謡曲はその権化であろう。

おわりに

宮中では毎年陰暦十一月の中の寅の日、肉体を去ってさまよう魂を鎮める神事を行なってきた。神祇令に見える鎮魂の祭りである。能の最初に演ずる神事物（脇能）も魂を鎮める古典芸能の視点から考察を進めたく念ずる。